

カンボジア研修報告書

研修期間 2008年2月25日～3月21日

大鹿 淳也

(筑波大学第一学群自然科学類4年)

1. はじめに

NGO での国際協力とはどのように行われているのだろうか。私の研修はこの疑問から始まった。カンボジアに関して、数十年の内戦に苦しんだ国であり、また日本と国際協力の歴史の中で長いパートナーシップにあるというイメージを持っていた。長期の戦争がこの国に与えた影響について、当初私は伝統文化について興味を抱いていた。カンボジアではポルポト政権下であらゆる伝統文化の実践が禁止され、技術や知識を持っていた人々がつぎつぎに処刑された。SVA カンボジアでは仏教を含むこの国文化実践に関する支援を行っているを知りその事業に関心を覚えた。

しかし、事前研修やボランティア作業を通じ、カンボジアについての知識を深めるうちに SVA ではこの事業で文化、伝統を重要視していることが理解された。そこで、私は学校建設事業においてカンボジア特有と思われる寺院が果たす役割について調査したいという考えにいたった。

研修中に聞いたスタッフの話、出席した種々の式典の様子、住民代表へのアンケートなどをもとに学校建設事業において住民、学校、SVA、そして寺院がどのようなかわりを持ちながら共通の意思を形成していくのかということについて記してみたい。

2. 小学校建設事業

小学校の建設は主に、予定地事前調査と行政との調整段階、マスタープラン作りと住民との調整の段階、建設段階、開校、贈呈の段階、モニターリングの段階の 5 段階に分けることができる。

各段階についてシェムリアップ州およびコンボントム州の 10 の小学校において調査したので順に報告する。

1. 予定地事前調査と行政との調整段階

トロペアンクロサン小学校（シェムリアップ州。写真 1）は日本のテレビ番組が支援者となる学校で、選ばれた経緯はほかの多くの SVA による学校建設の場合とは異なるが、たどる段階は同じである。私が訪れたときは、学校の状態の調査、教師や住民に対するヒヤリングを数回に分けて行い、その結果をまじえて郡の教育局の担当官と情報を共有し、建設の初段階について確認を取っている最中であった。この段階は SVA がはじめて建設を行う場合、非常に重要な段階となる。郡の教育局はその村の教育の実情について公に最も正確に把握している組織であり、彼らとの協力関係の有無は、建設後の学校運営に大きく左右する。また、彼らと建設契約を結ぶことで、他組織の参入の恐れがなくなり SVA 単独で事業を行うことができる。実際、今年是全国総選挙の年ということもあ

り、政治家による学校建設が相次いでいる。時により NGO による建設が決まっていた場合でも、途中から有力な政治家により、中断を余儀なくされてしまうこともある。そのために私が訪問した際には SVA の看板を設置していた（写真 2）。

2．マスタープラン作りと住民との調整の段階

2 週間おいてトロペアンクロサン小学校 2 回目の訪問の際には、区長、村長、教師、住民を集めた話し合いがもたれた（写真 3）。この話し合いには住民の学校に対するオーナーシップを高めようという目的がある。村人を代表した子どもたちにむけて村や学校にまつわるクイズをしたり、マスタープランと呼ばれる新校舎の完成見取り図を公表したりと、住民が学校建設に主体的に参加するためのきっかけとなる話し合いを持つ。

この段階の最終局面として調印式が行われる。クナプトル小学校（シェムリアップ州）で行われた調印式には、区長、村長、校長、軍関係者が出席し、SVA との間に契約を結んだ。この催しもまた住民総出で行われる。

3．建設段階

オーコンポッオンバル小学校（コンポントム州）では地鎮祭が行われていた。地鎮祭は建設が始まる前に、住民、郡教育局、支援者と SVA という学校建設の核となる人々が、初めて一堂に会するときである。住民は客人を迎え、僧侶のもと地鎮の儀式が行われた後は、建設開始の喜びを彼らと共有する。この際 SVA として、再び村人のオーナーシップ意識を確認し、郡教育局からは全面的な協力を求める。

ダットナット小学校（コンポントム州）は私が訪れたときは建設が始まって数週間のときであった。設計担当のスタッフがマスタープラン通りに建設が進行しているか業者に確認を取りながら作業が行われる。また、この小学校は今まで建設予定地に位置していた寺院の中で授業が行われていた。現在は寺院自体も取り壊され、別の寺院が仮の学校となっている。こういった状況で、学校建設事業の一環であるフリーリーディングという支援が行われている。これは、建設のモニタリングに訪れた先の児童たちに絵本を一人一冊手に取る機会を提供するもので、場合によりスタッフが読み聞かせをおこなうこともある。新しい試みだが、限られた物資、スタッフ、時間を有効に活用し支援につなげられるという良い前例になると思われる。

この学校はもとより強い寺院との協力関係があるため、建設後の継続的な関係を視野に入れ、僧侶とも逐一建設に問題がないか確認を取っていた。

4．開校、贈呈の段階

トムオー小学校ではちょうど新しい学校の開校、贈呈式に立ち会うことができた。ジャングルのなかに突然現れるという印象の村だが、村人総出で式に参加していた。この村で学校がそれほど切望されていたという表れだと思われる。SVA としては支援者も参

加する式であるため、住民と詳細な打ち合わせのもと式の運営をサポートする。

また、この式は郡教育局、州教育局、州副知事、州軍、支援者、そしてSVAからもスタッフ5名と所長が参加する盛大なものであった。これは、それぞれの組織の協力が学校の完成として成果を挙げたからにほかならず、長く記憶にとどまることであろう。特に、住民には学校に対するオーナーシップをさらに高める効果がある。

5. モニターリングの段階

1から4の段階を経て毎年10から20の学校が建設される。建設後の実態を評価するモニターリングも非常に重要な意味を持つ。建設後に支障をきたすような支援では持続可能な開発援助とはいえない。SVAでは2年間に渡ってモニターリングを行っているようである。しかし、特に隔離された遠隔地を建設地に選んでいるため定期的な訪問は容易ではない。現状では教育局や学校に問い合わせるか近辺に出張したときについて訪問するという形がとられている。

3. まとめ

私は1か月に渡って10の小学校を訪れることができた。それぞれの学校、村々で違った学校運営が展開されていることが分かった。また、学校建設とは、上述のように段階を踏むことで、そのコミュニティー自体を作り上げていくことでもあるということが深く認識された。参加型開発とひとえに言っても住民の協力を取り付けることは大変難しく、費用対効果が少ない場合も多いときく。SVAの学校建設はもとよりそのコミュニティーにあった力を「思い出してもらおう」ことにより、建設後の自主的な管理体制までも視野に入れている。それぞれ住民が、それを中心に村の将来像を描ける学校こそがドリームスクールである。

4. 課題

私の今回の研修のひとつの目的は国際協力を将来の職業として考えるために、国際協力の現場を知ることであった。しかし、実際行って見て、外国人がその国で事業をするためにはその国に対するより深い理解が欠かせないと感じた。その点で、カンボジアについて深く知る、または考える機会に大変恵まれた。

そして、もうひとつ感じたことは国際協力とは、当たり前だが、人と人の協力だということだった。事業チーム内、事務所内に信頼関係がなければ、住民、学校、行政との協力関係もまたつくることはできない。組織運営の重要さをひしひしと感じる日々だった。

総じて、カンボジアから帰って私に足りないものは何かと聞かれれば、それは「日本を知ること」そして「組織の一部として働く経験」である。カンボジア特有の多くの問題を知ることができたが、日本でも似た問題に対し、私は具体的な対策を知らない場合が多かった。国は違えど問題の本質は似ており、日本においても問題を知る努力をしない限り、

国際協力について考えることは難しい。また、国際協力はチームプレイだと感じた。チームでよりよい働きをするには、自ら考え、自ら技術をみがき、体力を付けなくてはならない。自分にはこれら何ひとつ実践していることがないことを痛感した。これからさまざまな場面でこういった課題を持ち、実行していきたいと思う。